

竹下復興大臣臨時記者会見録

(平成27年1月15日(木) 14:52~15:02 於) 相馬市役所)

1. 発言要旨

なし

2. 質疑応答

(問) 大臣、この度新地町と相馬市の視察は初めてだと伺いましたけれども、今回の視察のまず率直なご感想を伺わせてください。

(答) 1つの目的は、被災地の中で、比較的復興に向けての槌音が進んでいるエリアと伺っておりましたので、そのことをきちんと確認をし、なぜ進んでいるのか、あるいは、進んでいる地域にはどんな問題がまだまだ残っているのか、といったようなことを確かめようという思いで伺わせていただきました。その上で、いや、驚くほど進んでいると。今年度いっぱい、ほとんどの復興住宅が完成をする。2つの町とも相当進んでいるねと。特に新地町では、65パーセントの方が自宅で正月を迎えることができた、というふうに町長はおっしゃっておりまして、これは素晴らしいなということを改めて感じました。ぜひ進んでいるところはさらに復興を引っ張っていくことをお願いとか、我々も全力でお手伝いをする中で、復興の加速化をさらにさらに進めていかなきゃならん、ということを感じたところであります。

しかしその一方で、まだやらないことが、残念ながら一番進んでいるこのエリアでも、たくさん残っておりまして、例えばお年寄りの皆さん方が入っていらっしゃる場所の、それがだんだん介護を受ける状況になってくると、そういう地域の、あるいはそういう復興住宅のコミュニティをどうしていくか、どう築き上げていくか、どう維持していくのか。あるいはお医者さんに通われる、そのときの足をどう確保していくか。その人件費はどうなるんだ、といったようなことも含めて、復興が進めば、新たなステージになれば、また新たな問題、特に、いわばソフトと言ってもいいと思うんですが、そういう問題が派生をしてくると。これはしっかりと対応していかなきゃならんなど。私は以前から申しておりますように、コミュニティがしっかりしている、というのが田舎の強みでありますので、その強みをしっかりと確保してもらうまでやり抜くのが復興の道筋だと、こう思っておるところでございます。

(問) 加藤町長、立谷市長とお話しをされていらっしゃいました。冒頭、私たちも見させていただきましたけれども、お二人の町長、市長とのやり取りの中で印象に残ったこと、要望されたことなどを受けて、大臣として、ここに力を入れなければいけないなど、その辺について、今後の復興について、どう復興庁として携わっていくべきか、お考えについて伺わせてください。

(答) お二人とも、1つは、27年度で集中復興期間が終わると。その後について、どうするんだという思いは、強くお持ちでございました。これは私も、この部分については、しっかりと対応していかなければならないと。復興を成し遂げるまでが復興ですとい

と同時に、同時並行的に、そうした町そのものの復興というものを、合わせていかなければならない。それに加えて、さっきちょっとお話ししましたように、復興が進めば、例えば健康に注意をする人、あるいは子どもたちの、今日もちょっと話が出ましたが、PTSDに対応する体制というものも作って、よりしっかりと作っていかなければならない。そういった、いわゆるソフトの部分のウェートというのは、集中復興期間を越えた後は、相当大きくなるんじゃないかなと。この面にも力を入れていきたいと。こう考えております。

(問) 島根県選出の大臣として、今後2015年の目標、抱負というのを、県民、島根県にちょっとだけいただけないでしょうか。

(答) 2つの側面があります。1つは復興大臣として、安倍内閣の重要な政策課題である東日本大震災からの復興を、加速化していく。このことにまず全力を挙げるというのが、この1年の、私の今やらなければならない仕事でございます。そして一方で、私も同じ田舎の生まれ育ちでありますので、この田舎のエリアが被災に遭ったときの厳しさ、悲惨さといったようなものを、改めてもう、来るたびに痛感をいたしております、やっぱり地方が強くならなきゃだめだと。都会だけじゃだめだという思いは、これは日々、また強くいたしております。そういう中で、安倍内閣として、地方創生、地方を元気にするんだということも、重要な政策課題として今、出てきておりますので、石破大臣とも力を合わせて、地方が元気になるということにも、これはもう生涯の課題として取り組んでいこうと。こう改めて思っているところでございます。

(問) 先ほど出ました復興集中期間のあれは、延長という考え方なのか、それとも、それとは別にやり切るという、そのあたりについては、どのように今お考えなのか。

(答) 集中期間は集中期間として、1つの区切りであろうと、私は思っております。ただし、ここで復興が終わるのではなくて、必ず復興をやります。必ずやる。新たな、これからの復興のあり方、今までと同じという方向ではないと思うんです。その新たな復興のあり方、あるいはそのための財源のあり方等々は、私の個人としては、今後の5年間というものを見据えて、今後の5年間で1つの塊としてとらえるという方向で、新たな復興というものに取り組んでいこうと。

(問) 集中期間の、周期の後の5年間という意味ですか。

(答) そうです。

(以 上)